（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　山下　里香

『関東首都圏における在日パキスタン人バイリンガル児童の多言語使用：コードスイッチングとスタイルシフトをめぐって』は、東京近郊のモスクに併設されたコーラン講座における児童と教師の言語使用を詳細に観察した労作である。

第１章では、これまでの多言語使用に関する研究が、コードスイッチング（複数の言語を話し手と聞き手の両者がひとつの会話の中で使用すること）を中心に網羅的に報告される。特に海外の大都市における多言語使用研究において、多くの新たな取り組みが行われていることに注目する著者は、日本でもこの点で研究の進展を試みるべきことを認識しつつ、そのような取り組みのひとつとなることが本論文の目的であると述べる。

第２章でフィールドに関する詳細な説明が行われた後、第３章から本論文の中心的部分である、コーラン講座でのコードスイッチングのさまざまな機能が詳細に検討される。

まず３章では、児童たちが教師に投げかける質問に注目し、それがいずれの言語でおこなわれるかに注目し、2007 年と 2009 年のデータを比較する。その結果、２年弱の間に児童の間でウルドゥー語の使用が減り、日本語の使用が急増したことが報告される。

第４章以降は、個々の会話を詳細に検討しつつ、そこに観察されるコードスイッチングの働きが明らかにされる。まず第４章で、モスクのコーラン講座で見られるコードスイッチングのほとんどが、児童あるいは教師の言語能力を直接反映したものではないことが明らかにされる。例えば、児童が教師にウルドゥー語を使用するのは、speech accommodation ではないことが示される。次に５章では、コードスイッチングが、教師と児童、つまり大人と子供という境界を明示する機能を果たす例が紹介される。第６章では、コードスイッチングを通して、児童が教師との関係を設定するメカニズム（stance, alignment）が論じられる。第７章では、明示的な引用表現が検討され、コードスイッチングが引用の一部として機能することが示される。８章では、「接触日本語変種」（児童たちの親の世代の成人が使う、ウルドゥー語の干渉や不完全習得の痕跡を残す日本語）が、児童たちによって積極的に使われることが報告され、発言の権威づけ、あるいは、教師の権威と対応するための方策として見ることができるという解釈が提示される。最後に９章では、児童たちがさまざまな「大人の声」を聞き分け、それを有効に活用していることが描かれる。

自然談話をデータとする難しさは十分理解できるものの、解釈に一層の客観性を与える必要があること、ウルドゥー語の表記に不統一があること、コードスイッチングの理論的研究への貢献が期待できるのにそれが十分に実現されていないことなど、更なる改善の余地がないわけではない。しかし、膨大なデータを使い、教師２名と児童数人によって構成される小さなフィールドでの言語使用に、児童と教師のみでなく、児童と成人、ウルドゥー語と日本語（さらにときには英語）、ムスリム（イスラム教徒）と非ムスリムなど、多様な集団や言語が持つ価値観や基準が反映していることを、そして、そのような異なる価値観や基準を、児童たちがときに能動的に選択して言語使用に反映させていることが、実際のデータと優れた解釈によって示されている点は、高く評価できる。

以上の理由により、審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに十分値するものと判断する。